Project Story　INDIA

まもる・つくる・ひろげる

地域づくりを支える若い指導員たち

しっかり者の
女性指導員パドマ

オラたち村の百姓、そして指導員

2007年より、ムラのミライと共に活動を続ける村人たちの中から「指導員」たちは誕生しました。ムラのミライからの指導員研修を受け、周辺の村へ流域管理技術の研修を行い、振り返り、また次の研修に活かすというサイクルを通して、日々、指導員としての技術を向上させています。彼・彼女たちは、「村で唯一高等教育を受けた」とか「村一番の有力者」とか、そういった特別な人たちではありません。中学校まで卒業した指導員もいれば、小学校を中退した指導員も、読み書きの出来ない指導員もいます。

ムラのミライから流域管理技術を学び、実践していったなかで、流域とは個人で管理できるものではなく、村で、そして流域を共有する地域全体で管理していくことの必要性に気づき、「周りの村でも、オラたちの活動を広めよう」と立ち上がった普通の村人たちが「指導員」たちです。なので「指導員」は、村での肩書でもなければ、仕事でもありません。彼・彼女らは他の村人と同じように農業を生業としています。

ブータラグラ村

若き指導員シムハチャラム

ブータラグラ村の指導員

どんなときにも堂々と振る舞うモハンは、村のリーダー的存在。指導員として近隣の村で研修をするときも、参加者としてムラのミライの研修を受けるときも、誰かが話していればそっと見守り、静かであれば、すかさず声をあげてその場を盛り上げます。
誰よりも村のことを、そして村人たちのことを思うモハンだからこそ、「(水不足や高利貸しからの借金に苦しむ) オラたちの村を変えたい」と、ムラのミライが他の村で行っていた流域管理の研修に、事業が始まった当初から数か月間、一人で参加し続けました。それが後々、ムラのミライとブータラグダ村が活動を共にするきっかけとなり、活動開始から研修と実践を継続してきたブータラグダ村は、いまでは流域保全活動でも農業改善活動でも、他の村にとってお手本の村になりました。

他の指導員たちの活躍も、モハンに負けてはいません。エースと呼ばれるにふさわしい、センス抜群のアナンドは、研修に参加する村人の理解度を把握しながら、質問の仕方を変えたり、進行速度を変えたり、機転を利かしながら研修を行います。責任感の強いラッジャイヤ、いつも元気なドルガラオ、タフで粘り強いラメッシュ、そして、少し恥ずかしがり屋の最年少のシムハチャラムは、地元の小学校の先生になるという夢を追いかけつつ、農家として、指導員としての活動も続ける道を模索しています。

ブータラグラ村の指導員6人はみな20代の青年ですが、そのうちの5人が父親でもあります（立っている男性左からモハン、ラッジャイヤ）

ポガダヴァリ村の指導員

ポガダヴァリ村には年齢も性別も異なる4人の指導員がいます。かつては、みな、都市への出稼ぎと日雇い労働に頼らざるを得ませんでしたが、2007年から行っている流域保全活動の成果が出て、生業である農業で生計を立てられるようになりました。そして、いまでは、農業に精を出す傍ら、指導員として周辺の村で流域管理の研修を行っています。

唯一の女性指導員でしっかり者のパドマは、研修に参加する村人たちのことも、一緒に研修を行う指導員たちのことも、誰よりもよく見ています。「チャンドラヤ、この部分言い忘れてるよ。」と他の指導員をフォローしたり、研修が終われば「次は女性参加者がもっと発言できるように進めたい。」と反省したり、一番真剣に取り組み、一番研修するのを楽しんでいる彼女は、ポガダヴァリ村の村人からも周辺の村人からも頼られる存在です。

オッチャン指導員のダンダシは、その貫録で研修に良い緊張感をもたらしてくれます。「あれが欲しい」「これが欲しい」と外部の人に頼ってばかりだった隣の村での研修では、「まずはてめぇの頭で考えろ！」と喝を入れたり、時には、「チャンドラヤ、そこちょっと違うじゃろ」と冷静にツッコミを入れたりと、頼れるオッチャン指導員です。

研修で学んだことをいち早く取り入れたり、他の村人に活動への参加を促したりと、いつも積極的なチャンドラヤは、周辺の村人やムラのミライとのコミュニケーションの中心的な存在です。

3人に遅れて指導員になったパーライヤも、3人の研修をサポートし、時には自分が先頭に立って研修を行いながら、指導員としての技術を磨いています。

黒板左女性：パドマ
黒板右男性：ダンダシ

オラが、アタシが、続ける地域づくり

ブータラグダ村でも、ポガダヴァリ村でも、それぞれの指導員がそれぞれの色を出しながら、互いに助け合い、切磋琢磨し、流域管理の技術を村から村へと伝えています。

ある日、ブータラグラ村のモハンが、「これからオラたちの村をどうやってつくっていくか、(指導員の) 6人でよく話し合っているんだ。」と言っているのを耳にしました。後日、ブータラグラ村の指導員たちは、【(流域管理技術に引き続き) 有機農業を隣の村に広めていく】という彼らの目標を話してくれました。

自分たちの村で有機農業を普及していくためには、土や森や水を共有する同じ流域内の村にも有機農業の技術を普及する必要があると、彼らは考えたからです。そして、この目標は、流域内の資源の循環の仕組みを理解し、それを他村に伝えている指導員たちだからこそ、考えつくことができた目標です。ムラのミライとのプロジェクトは2015年8月で終了しますが、その後も、彼らが中心となって、村づくりを進めていく様子が垣間見えました。

土をつくり、森をつくり、水をつくり、それらを農業に活かす。そして、村の指導員たちが、その活動を周辺の村にも広めていく。南インドの小さな農村の、普通の村人たちの中から生まれた流域管理の指導員たちは、気付けばそれぞれが村のリーダーとなり、村を引っ張る存在となりました。ムラのミライとの8年に及ぶ流域管理プロジェクトで誕生した指導員兼リーダーたちの、地域づくりの活動はまだまだ始まったばかりです。

Project Data

INDIA

農業で暮らしを営み続ける村人たちによる「循環する」村づくり

どこで

■インド　アーンドラ・プラデシュ州
スリカクラム県

だれが／だれと

9 か村の村人たち

なぜ

木々が減り土壌が流れ出し、荒廃していく森林。現金収入のために都市へ出稼ぎに行く村人たち。
「出稼ぎに行くことなく、孫子の代までもここで暮らしていけるように」という村人たちの強い思いと共に、ムラのミライは 2007 年から「流域」という単位で、村と周辺の山々、農地を総合的に捉え、自然資源を利用し管理していくための考え方やスキルについて、村人たちに研修を行ってきています。

2014 ハイライト

農業改善に取組む村では、ミミズを使ったたい肥を年間 800 キロ以上自分の村で賄えるようになりました。新しく農業改善に取組んだ村でも、農薬の使用をやめ、栽培計画や保水土対策を行うことで、コスト削減や、長期間に渡って多種類の作物を収穫することに成功しました。
また、近隣 6 か村でも流域管理委員会が設立されました。1 か村で先駆的に行う総合計画づくりでは、村の将来ビジョンをかかげ「自然資源管理」「有機農業の普及」「内部資金運用」を 3 本の柱として、2020 年までの活動計画が策定されました。

キッチンガーデンでの効果的な野菜栽培

稲を脱穀している村人

ミミズを使ったたい肥づくりのデモンストレーション

流域管理委員会を中心に村人が設立した種子銀行（シード・バンク）の外観

種子銀行の内部▶

キッチンガーデンモデル農地

これから

引き続き、流域管理委員会を中心に、各流域での保水土対策を行っていきます。同時に、これまでに農業改善を実践してきたモデル農家たちが指導員となり、周辺の村にも農業改善のコンセプトを普及していきます。

Project Data

SENEGAL

インドからアフリカへ

「村人が主役」の地域づくり手法を技術移転

インドで研修

どこで

■セネガル共和国
ティエス州グニエヌ県
バガナ村及びその周辺

だれが／だれと

上記の農村に暮らす人々

なぜ

若者たちが、都会や海外に出稼ぎに出なくても、豊かに暮らして行けるような農村社会を実現したいというのが、パートナーとなる NGO「Intermondes」スタッフの切実な願いです。
そこで、地域の農民たちの農業技術および営農の能力を強化することで、乾燥の進む農村地帯において、水資源や土地といった資源を、持続的かつ効率的に管理・運営する農村開発プロジェクトを新たにスタートします。

2014 ハイライト

インドで取り組んできた農村開発プロジェクトで培った知識・技能をセネガルで応用するため、Intermondes 主要スタッフ 2 名をインドのプロジェクト地（10 ページ参照）に招聘し、1 ヶ月間の研修を実施しました。
2 名は、農村における自然資源の管理・活用の実践方法および村人主体の活動を促すファシリテーション技術について学び、理解しました。

Intermondesとインドのスタッフの集合写真（インド、パタパトナム研修センター）

資源循環型の村に向けての総合計画づくりを視察（インド、アーンドラ・プラデシュ州スリカクラム県）

流域管理事業に参加している村で研修を受けるIntermondesスタッフ（インド、アーンドラ・プラデシュ州スリカクラム県）

村を訪れて流域のコンセプトを学ぶIntermondesのメラニー氏（左から2人目）とママドゥ氏（左から3人目）（インド、アーンドラ・プラデシュ州スリカクラム県）

農業改善の活動を視察（写真はミミズを使ったたい肥）（インド、アーンドラ・プラデシュ州スリカクラム県）

これから

セネガルでの活動を本格的に開始するための準備として、研修の成果を Intermondes 内で共有・普及をします。また、助成金申請などで、プロジェクト始動の資金集めを実施します。